

## 図書館 利用案内

今年度も、『図書館だより』で、本とそれに関連する話題を皆さんに提供していきます。

年度はじめにあたり、図書館の利用方法を書きますので確認してください。

「本や図書館に縁がない」というのはちょっと寂しいです。新緑がきれいな季節になりました。連休も目の前です。図書館を覗いてみてください。

## 図書館の利用について

【開館日】 授業日(行事日を含む)  
※長期休業中は別に定めます。

【開館時間】 常時開錠

【貸出冊数】 2冊

【貸出期間】 2週間

## 【本を借りるとき】

- ①カウンターにいる図書委員(または担当教員)に借りたい本を渡します。その際、学年・クラス・氏名を話して下さい。
- ②図書委員がパソコンで借りる人と本を登録します。これで貸出手続きは完了です。
- ③図書委員や教員がいない場合は、カウンターにある紙の貸出表に氏名、書名等の必要事項を手書きしてください。

## 【本を返すとき】

- ①カウンターにいる図書委員(または担当教員)に、返却する本を渡してください。
- ②図書委員はパソコンで、返却登録をします。これで返却手続きは完了です。
- ③図書委員や教員がいない場合は、カウンターにある返却ボックスの中に本を入れてください。

## 【図書館の利用のしかた】

- ①入館するときは、カバン・コート類は廊下の棚に置いてください(貴重品は置かない)。
- ②館内での飲食は禁止です。会話も控え、他に迷惑をかけないように配慮してください。
- ③本を見た後は必ず元の位置に戻してください。
- ④手続きせずに図書を持ち出さないでください。
- ⑤本を紛失したり破損した場合は、担当職員に申し出てください。怒ったりはしません。
- ⑥学習に利用したあとの机の上のゴミや消しゴムカスは、集めてゴミ箱に捨ててください。
- ⑦最後に退出する人は、窓を閉めることと、消灯を必ずしてください。

## 【読みたい本がないとき】

読みたい本がある、また、どこにあるかわからない時は、担当教員に話してください。

購入希望図書がある場合は購入を検討しますので、カウンターの申込用紙に記入してください。

## 【貸出開始】

本格的な貸出開始は委員会集会後の26日(水)からとしますが、それ以前でも貸出ます。カウンター上の紙の貸出表に氏名、書名等の必要事項を書いて借りてください。26日(水)までは図書委員はつきません。

## ライブラリーストリート

校舎2階の職員室から図書館への廊下を「ライブラリーストリート」と呼んでいます。

ここでは、新聞と雑誌を置いて、自由に見られるようにしています。もちろん、関心を持った記事をコピーしたり、スマートフォンで写真を撮っても構いません。

また、月ごとにテーマを企画して本を並べています。昨年度の主な企画は、

- ・ウクライナとロシアの関係とは
- ・夏は、戦争を考えたい
- ・夏休み 昆虫食を学ぼう!
- ・怪奇・ミステリ・推理小説 特集
- ・鉄道開業150年 三島由紀夫 特集

などです。並べてある企画本も貸し出します。手に取って見てください。

## 博物館・美術館を見に行こう

夏と冬の2回、「博物館・美術館を見に行こう」と称して、美術館や博物館を見に行く企画を希望者を募って実施しています。

昨年度は

- ・特別展ポンペイを見に行こう(7月 仙台市 宮城県美術館)
- ・東京の美術館・博物館を見に行こう(1月 東京都 東京国立博物館、国立西洋美術館 ほか)

を実施しました。アート、文化、芸術、歴史、科学などに興味を持つ生徒が多数参加し、「楽しかった」「刺激を受けた」「また企画してほしい」などと好評でした。また、博物館・美術館に加え、岩手にはないような大型書店にも寄り、本を見て購入する時間もつけています。本好きにはたまらないとしても好評です。

今年度も実施しますので、ぜひ参加してください。

## 【図書課担当教職員】

- 佐藤 貴之(3学年・書道)
- 岩城 桂子(3学年・国語)
- 山屋 賢一(2学年・地歴)
- 高橋 明寛(校務補助員)

# 考えるという、とても面白いこと

レコードが CD に入れ替わっていったのは、私が高校生のころだった。

「パソコン」というものが現れ、ブラウン管テレビのようなディスプレイのパソコンが水高にも視聴覚準備室(現:文芸部の部室)に2台入り、千田清朗先生という数学の先生がこれをいじっていた。数学が苦手な千田先生にしばしば質問に行っていた私は、それを横目でめづらしく見ていた。1982 年ごろである。何十年後の未来、このパソコンが「一家に一台になる」といわれた。「へえ〜」くらいにしか思ってなかったが、今は「一人一台」となり、スマートフォンなる想像できなかったものまで日常になった。

5人だったか、6人だったか、覚えていないが、神輿を担いでいる絵がテレビに映され「将来、老人※を3人で担ぐ時代が来ます」といわれた。これも現実となった。

学者やマスコミが予想したり、危惧することは、おおむね現実となり、予想以上になっている。

CD も過去のものとなった。

昨年2月、ロシアがウクライナに侵攻した。その前月から、ニュースはその兆しを報道し、ウクライナを守るためにアメリカや NATO が参戦すれば第3次世界大戦になると危惧された。2月をはじめ、2年生の朝の HR でその話をしたが、これを知っている生徒は皆無だった。そして、2月24日、ロシアはウクライナに軍を進めた。その余波として、世界は燃料不足に直面した。エネルギー需給の不安を経験した EU 諸国は、脱原発に向かおうとした方向に戸惑いを感じている。エネルギーだけではない。食料も軒並み高騰している。私たちがコンビニエンスストアで買うお菓子ひとつに至るまでその影響を受けている。

昨年、ライブラリストリートでは「昆虫食」を取り上げ、その本を紹介した。食肉の生産は、大量の穀物を必要とする点で環境負荷が極めて高い。気候変動により水が不足する。穀物生産には大量の水が必要なため、大量の水を必要とする穀物の生産量が減少するらしい(参考:パーチャルウォーター)。近い将来、世界で水と食料の奪い合いが始まるという。そして私たちは、肉食から昆虫やプラントベースフード(人工肉)へシフトしていかざるを得ないようだ。

気づかないでいるだろうが、すでにプラントベースフードはイオンでも普通に売られている。

ココロギを粉末にして混ぜ込んで作ったせんべいやチョコレートが売られている。HR で食糧の話をしながらか、ココロギせんべいを生徒に紹介した。「無理強いはしないので、食べても構わない人は…」とその場でふるまった。

これから社会が昆虫食へとシフトしなければならないことを、多くの生徒は前述同様知らない様子だった。

「ココロギの入っているせんべい」に多くが顔をしかめる。

そこで私が、それが MUJI(無印良品)の商品であることを話すと、こわばっていた表情が微笑み変わった。この反応は何なのか? この本質を理解していないのではないかと

すべて他人事(ひとごと)。結果が我が身に及ぼうとしても、身に迫る危機感がない。自分だけが行動しても意味がないと感じている。暮らしや経済だけでなく、平和や人権といった人類の普遍的価値についても…

「地球温暖化による異常気象」はまやまかして、「私たちの快適な生活の追求が異常気象を起こしている」のである。

こんな話をすると、「尖った人」みたいに思われて、周りから敬遠されるのだろうかと思ってしまう。引かかるとはたくさんあるが、わたしも遠慮している。たまにしか「尖って」いないつもりである。

陳腐な表現だが、「広い視野」を持ちたい。

皆さんは学ぶことが好きか?

「好き」とはいわずとも、学ぶことに何らかの「手ごたえ」があるか?(太公望がいうには、釣れなくても、引きの手ごたえと魚との駆け引きが楽しいのだという)

そして何を学ぶか、何のために学ぶか?

今答えられなくても、模索したいと思っているか?

「学び」とは狭隘なものではないと思う。興味のベクトルや分野は、その向こうで何か別なものや誰かと結びつき、何らかの広がりを持つと思う。文学でも芸術でも、どんなベクトルでもだ。

## AI ChatGPT

### しかし、考え続ける限り、人間の可能性はまだある

ChatGPT

皆さんは、知ってますか?

ここ2か月ほどの新語のように思われているが、昨年11月に登場している。その評価も議論され始めた段階だ。

「AI は芸術性を持つ作品を生み出せるか」テレビ番組が取り上げていた。

画像生成 AI で「芸術的」猫と入力するとそれに即した「猫」の絵画を作り出す。AI はネット上の無数のイメージを読み込み、学習し、そこから平均イメージを出力する。いわば「データベース型」。誰かの 100 点ではなく、全員の 80 点を狙いに行く。その点で、突出した芸術性を持つ作品を生み出すのは難しいという。

突出した芸術性を持つには、何が好きか、何が嫌いかを判断する基準、つまり審美眼が必要で、この審美眼を人は持ち得ても AI が持つことはできない。

AI はデータを間違いなく正確に保存できる。それにより誰もかなわない膨大な知識を得る。しかし、そこにラベルを貼り付け、何に準じてデータを整理するかということになると、あくまで人間がラベルを与えないといけな。

人は自分がいる環境が生存に適しているかを視覚、聴覚、触覚など、さまざまな感覚によって判断している。そして、この感覚に対する判断の積み重ねが審美眼につながっていく。例えば、その判断材料のひとつが色。例えば晴天の穏やかな気候の日というのは生き物にとって心地いい。なので、世界中の民族でスカイブルーが嫌いな色という民族はない。一方ほとんどの民族で荒地や死体、便の色である黄土色は共通して嫌われている。こうした「環境が良いかどうか」の判断の積み重ねが審美眼を生むベースとなる。色にそういう環境価値で説明できるものがあれば、その複合体でできあがっている絵画アートもその延長線上で説明できる。何が快で、何が不快なのかということが高度に洗練されていって審美眼とつながる。

また、AI で美しい絵は描けるが、歴史に残る美しいアートの制作、美を拡張した作品や、今「美」ではないものを「美」にしてしまう行為は、新しい発想がないとできない。AI 自身が自分で答えを出すことはできない。

人間の脳は新しい世界の見え方を創造する。絵画で雨を縦の線で書くことが多いが、ギユスターヴ・カイユボットが1877年に制作した油彩画「パリの通り、雨」では雨は描かれていない。濡れた石畳、傘をさしている人で雨の風景を描いている。それが1857年、歌川広重は「大はしあたけの夕立」で雨を線で描いた。これが世界中に広がる。こういう世界の見え方に、脳が気づくことによって、雨がこういう風に見えるはじめた。つまり見え方を変えた。

はたして、AI や ChatGPT にそれはできるか?

また、「AI は人間の知的分野から浸透していくのかもしれない」という話を聞いた。

これはどういうことか?

例えば医療の現場で、AI が医師に替って診断を下すことがすでにあるが、看護の場面では AI が具体的に手を下すことはまだない。それは、極めてマニュアルな分野であるからだ。

1980年代に、ジョン・ネイスピッツ(米 未来学者)はその著書『メガトレンド』で「ハイテック=ハイタッチ」ということを述べている。ハイテックな社会になればなるほど、同時にハイタッチ、つまりヒューマンタッチな人間性に回帰していくというもので、機械にはできない分野こそ増えていくと述べた。私はこれを思い出した。

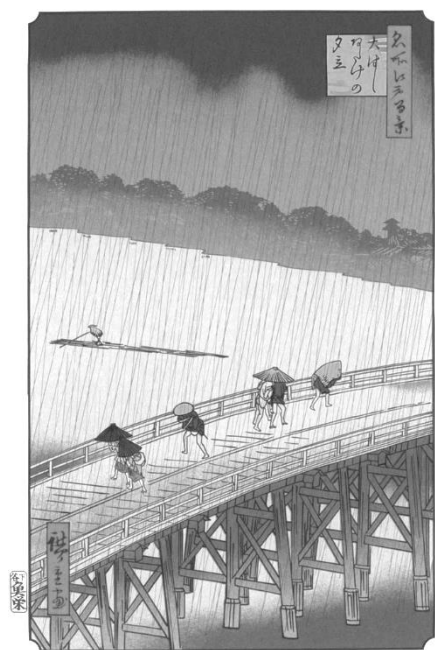
年度はじめと思い、だいぶ畏まったことを書いてしまった。

興味のベクトルや分野は、その向こうで何か別なものや誰かと結びつき、何らかの広がりを持つ。

硬いと考えず、なんでもいので、ちょっと本を手にして何かを考えてみよう。

※以前高齢者を「老人」といっていた

(佐藤貴之)



歌川広重 大はしあたけの夕立